

研究論文

東南アジア諸国が抱いた日本像¹⁾

ー日本占領期を中心にー

久保田 武¹

太平洋戦争中に日本が占領した東南アジア²⁾ 諸国の歴史的・地理的・文化的・政治経済的条件と戦争及び統治状況を比較し、各国がそれぞれ抱いた日本像の共通点と相違点を最初に明らかにする。続いてこの整理された内容に基づき、日本が東南アジア諸国に対し、太平洋戦争で残した負の遺産を、友好関係増進のためにどのように生かしたら良いのかを検討し、ささやかな提言をしたい。また日本国内で、特に近年顕著になってきた植民地支配、日中戦争、太平洋戦争の歴史的解釈を巡る論争³⁾ についても、この調査を基に筆者なりに両者の溝を狭める提言をしたい。以上がこの小論の目的である。

東南アジア諸国は、長年日本による不本意な植民地支配を受けた韓国と、特に満州事変以後、日本軍の侵略を連続して受けた中国とは異なり、日本による占領期間は比較的短く、領土や従軍慰安婦のような難しい懸案はすでに解決されている。加害を忘れずに未来志向で向き合うことが大切であると考えます。

なお日本像は、もっぱら関係諸国の教科書またはその類書⁴⁾ と指導者の回想録によることにした。その理由は、教科書には、各国がそれぞれの若い世代に対して日本についての公式見解に近いものが発信されていると判断したからである。また指導者の回想録に書かれている日本像は、まさにその国が日本に対して抱いた日本像の公式見解に最も近い位置を占めていると考えたからである。

日本占領期の東南アジアについての先行文献は、筆者の知る限り教育学会誌にはないが、「東南アジア史学会会報」をはじめ「上智アジア学」、「アジア経済」に掲載されている詳細な論文や単行本が相当数存在する⁵⁾。しかし教科書と指導者の回顧録を柱にして東南アジア全体を鳥瞰した日本像に日本の教科書問題を関連して提言をした論文は、寡聞にして筆者は知らない。そこで、先行論文の隙間を埋められると考えこの小論を書いた次第である。至らない点、思い違いなどご指摘頂ければ幸いである。

この小論を書き始める前は、韓国・中国を含めた近隣アジア諸国全体を考えたが、紙面の制約と限られた時間では困難なことが分かったので、難しい問題を抱える韓国・中国は別の機会に譲り、今回は4年間滞在したことがある東南アジア諸国だけを書くことにした。

1 日本教育大学院大学 学校教育研究科

なお東南アジア全体についての概括的文献として、以下の書物をあげておく。

E・H・G・ドビー「東南アジア」（小堀巖訳 古今書院 1961）

ブライアン・ハリソン「東南アジア史」（竹村正子訳 みすず書房 1967）

岩田慶治「東南アジアの少数民族」（NHK ブックス 1971）

須田卓・日比野丈夫・蔵居良造「華僑 改訂版」（NHK ブックス 1974）

キーワード：東南アジア、太平洋戦争、植民地、解放、日本占領期、華人、分断統治 憲兵隊、恐怖統治

1. 東南アジア諸国の日本像を探る

（1）インドネシアの日本像

①参照した主な文献

- a. イ・ワヤン・パドリカ「インドネシアの歴史—インドネシア高校歴史教科書」世界の教科書シリーズ 20（石井和子監訳 訳：裾沢英雄・菅原由美・田中正臣・山本肇 明石書店 2008）
- b. ソエロト「全訳世界の歴史教科書シリーズ 32 インドネシア」（伊藤定典訳 帝国書院 1983）
- c. 「ハッタ回想録」（大谷正彦訳 めこん 1993）
- d. 林英一「インドネシア独立戦争を戦った男たち」（作品社 2007）
- e. 林英一「東部ジャワの日本人部隊」（作品社 2009）
- f. 鈴木政平「日本占領下バリ島からの報告」（草思社 1999）
- g. A History of Southeast Asia （by D.G.E. Hall 1970）

②インドネシアの歴史教科書から

「インドネシアの歴史—インドネシア高校歴史教科書」（明石書店）では、まず日本が明治維新以後、近代化に向けて諸改革を実現した過程を詳述し、続けて

「日本のロシアに対する勝利は、アジア民族に対し政治的自覚をもたらすとともに、アジア諸民族を西洋帝国主義に抵抗すべく立ち上がらせ、各地で独立を取り戻すための民族運動が起きた。-----後略」⁶⁾

と、日露戦争の影響を他の多くのアジア諸国と同様に高く評価している。しかし続けて、

「自らをアジア民族の兄貴分とみなし、弟たち、すなわち他のアジア諸民族を指導する義務があると主張した。また日本の支配地においては日本化が広く行われたが、これはアジアにおいて西洋帝国主義の地位に取って代わろうとするためであった」⁷⁾

と日本の問題点をはっきりと指摘している。

さてオランダ軍が殆ど抵抗せず日本軍に降伏し⁸⁾、また日本の敗戦までインドネシア主要部が

戦場にならなかったことは、フィリピンのように激しい戦闘が前後2回も行われた国に比べ、現地と日本の関係をそれほど悪化させない効果があった。進駐した日本軍が協力を呼びかけたのに対し、スカルノ、ハッタを含む民族指導者たちは当初は歓迎している⁹⁾。しかし日本軍には、横暴な側面があり、また多くの若者を労務者としてインドシナ方面に徴用、多数の行方不明者も出たので、次第に民衆の反感が増加し反乱も起こった¹⁰⁾。これに対して日本軍は常識を超える残虐な報復をし、多数の現地人が殺されている。

その反面、日本占領期には良い結果も残したと書いている部分もある。このような表現は、占領下にあった他の東南アジア諸国の教科書にはあまり見られない。即ち、教育の普及を図ったこと、オランダ語が使用禁止になりインドネシア語が共通語として確立され教育の向上がはかられたこと（前掲文献 f. 鈴木政平「日本占領下バリ島からの報告」を参考されたい）、さらに、オランダ人に代わって行政・経済などの実務を経験したこと、日本軍によって、連合国に対抗するため郷土防衛義勇軍（ペタ）が若者の間に組織され、教育と軍事訓練を受けたこと、その結果日本敗戦後対オランダ独立闘争の際彼らが黒柱になって活動したことなどである¹¹⁾。日本敗戦後も復員せずこの独立闘争に武器を持って参加した若い日本兵が少なからずいたことも、日本に対する友好的感情の増進に貢献したように思われる（前掲資料 d.e. 林英一著「インドネシア独立戦争で戦った男たち」他一冊参照）。

また、日本の敗色が濃くなった1945年3月、原田熊吉中将が独立準備調査会を発足させ、スカルノやハッタが中心になり独立の準備が進められた。日本の無条件降伏後、前田精海軍少将邸で独立宣言を作成、8月17日に独立宣言を発表、スカルノとハッタが署名した。

明らかに現地日本軍のトップが、オランダが進駐する前に、インドネシアの民族指導者に手を貸し独立体制を確立させたことを物語る。教科書にここまで記述している点で、他の東南アジア諸国とはかなりかけ離れた記述内容である¹²⁾。

③モハマッド・ハッタの回想録から

最後に前掲 c. 「ハッタ回想録」¹³⁾ から抜粋し、要約と引用を交えて紹介する。

モハマッド・ハッタはスカルノとともにインドネシア独立運動の双頭指導者であった。1949年の独立後、1956年ハッタが辞任するまで対等な立場の正副大統領として新しい国家の舵取りにあたった。

彼の回想録によれば、日本軍進駐までオランダ植民地当局に拘禁されていたハッタは、直ぐに日本軍政部に招かれ、軍首脳部から日本軍政に協力する用意があるか訊ねられた。

『「日本はインドネシアを植民地化するつもりですか」と私は質問して返事に代えた。「まったく違います。日本は植民地化されてきたインドネシアの独立を助けるためにここに来ました。この私の言葉を武人の説明として受け取ってもらいたい」。そこで私は、インドネシアの解放にあたっての日本軍の功績に感謝する旨を述べた。日本の軍事政府と協力する用意はあるが、政府の職員としてではない、と続けて言った。「軍政に自由にアドバイスする顧問ということ

だけになった方が良いかと思います。この場合、私は日本の高官の誰からも指示は受けないこととなります。だから私の勧告は私自身の責任に基づいて行います」¹⁴⁾

軍政監はハッタの発言に同意し、事務所と車を提供した。彼が軍政部に勧告した例の一つあげると、

「大勢の人が私の事務所に來て、いとも簡単に人をひっぱたく日本軍の態度について、苦情を述べた。殴られた者がかっとなって、短剣を抜いて殴った日本人の腹を突き刺すこともありうるという者もいた。この苦情に関連して、私は日本の軍事政府に、日本軍の将兵が日本人とインドネシア人の慣習の違いに留意すべきだという文書を作成した」¹⁵⁾。

インドネシア人にとって、頭部は神聖な場所とみなされているので、日本人に対する恨みも生まれると付け加えている。

この例のように、日本軍政部が、インドネシアの独立運動指導者を介して、統治が円滑に行われるように配慮したことが、日本への不満・反感が比較的小さく抑えられ、教科書にもそれが反映されたように思われる。

(2) シンガポールの日本像

①参照した主な文献

- a. Social and Economic History of Modern Singapore 2 (by Lower Secondary History Project Team Curriculum Development Institute of Singapore: Longman
- b. History of Malaysia and Singapore(1400 ~1965) (Huang Chai Lean1982, A guidebook for history students in the last two years of secondary school Curriculum Planning & Development Division, Ministry of Education 2007)
- c. The Japanese Occupation 1942 -1945 A Pictorial Record of Singapore (National Heritage Board National Archives of Singapore Times Editions)
- d. 「リー・クアン・ユー回顧録」 (上) (小牧利寿訳 日本経済新聞社 2000)、
- e. 戸川幸夫「昭南島物語」上下 (読売新聞社 1990)
- f. Wong Ping Fah, Goh Choon Kang 編「シンガポールの政治哲学」上下—リー・クアン・ユー首相演説集 (田中恭子訳 井村文化事業社 1988)
- g. Lim Chong Yah 編著「シンガポールの経済政策」上下 (岩崎輝行・森健訳 勁草書房 1995)
- h. A History of Southeast Asia (by D.G.E. Hall 1970)

②始めに

日本軍占領時代 (1942.2.15~1945.8.15) の日本像は、インドネシアと比べるとはるかに厳しい。憲兵隊を核に推進した恐怖統治、経済的困窮、見え透いた民族分断統治は、アジアの盟主日本が植民地解放に來たという宣伝を台無しにした。特に人口の四分の三を占める中国系住民 (華人) を標的にした非人道的差別と虐待は、戦後半世紀以上経っても、反日感情が根強く残る原因になった¹⁶⁾。

なおシンガポールでは、2012 年 10 月現在上級中学(Upper Secondary School)歴史教科書改訂中のため、該当学年の新しい教科書が入手できなかったのが残念であった。

③リー・クアン・ユー回顧録¹⁷⁾ から

筆者が知る限り、占領直後のシンガポールの状況を、自分の体験に基づき、誇張を交えず記述した最も信頼できる文献は、初代首相のリー・クアン・ユー回顧録である。そこでまずそれを中心に日本軍の行動を通して作られた日本像を紹介する。

「敗戦により、英国人はアジア人に優越するという白人神話を打ち砕かれ、権威を失墜したが、日本人も解放者としてより征服者として君臨し、英国人よりも残忍で常軌を逸し、悪意に満ちていることを示した。日本占領の 3 年半、私は日本兵が人々を苦しめたり殴ったりするたびに、シンガポールが英国の保護下であればよかったと思ったものである」¹⁸⁾

とリー元首相は書いている。シンガポールにおいて英国人は無条件の尊敬と権威を失ったが、日本人は嫌悪と恐怖心を植え付けてしまったのである。

リー元首相によれば、日本軍兵士は、些細なことで住民を殴り、炎天下で何時間も座らせたりした。しかし筆者の考えでは、シンガポールで日本軍が犯した取り返しがつかない誤りは、占領早々行われた華人の大量虐殺である。

再び彼の記述に戻ると、英軍降伏 3 日後の 2 月 18 日、18 歳から 50 歳までのすべての華人男性は、日本軍によって 5 か所の検問所に集められた。女性・子供・老人も出頭させられた。当時 18 歳だったリーも出頭した。すでに集められている華人青年グループに加わるよう指示された時、本能的に危険を察知した彼は番兵に忘れ物を取りに部屋に戻るという口実が認められてその場を逃れ命拾いをした¹⁹⁾。チェックポイントでいい加減に分けられた人々は、22 日まで拘禁されたのち、後ろ手に縛られ、40~50 台のバスでチャンギ刑務所に近いタナ・メラ・ベサールの海岸に運ばれ、機関銃で虐殺された。犠牲になった華人青年はこの間 6 千人に達した。この事実は、奇跡的に命拾いした青年の証言で戦後明らかになった。その他にも戦後発見された死体から、シンガポール商工会議所の推定によれば、大量虐殺の犠牲者は 5 万人から 10 万人になるという。日本軍のこのような非人道的蛮行は、中国本土での抗日戦争資金協力者や日本製品ボイコット運動に参加した華人などの一掃作戦として、あらかじめ参謀辻政信大佐が計画し日本軍司令官山下奉文の了解を得ていたことであった²⁰⁾。平和回復後、ケンブリッジ大学に留学し、法学部を首席で卒業したリーは、帰国後独立したシンガポール政府初代首相として 31 年間指導し、資源がない小国を東南アジアで最も豊かで治安の良い国家に育てた。その彼が、瞬時の機知と勘、そして彼を取り巻く日本軍のいい加減な区分と混乱状態という偶然が重なって死を免れたことに、何か運命的な神の手を筆者は感じる。

このような無法かつ残虐な行為にもかかわらず、リー元首相は、死を恐れず死を覚悟して戦闘に臨む日本兵を、世界でも最強の部類に入ると評価している。その一方で、ジンギスカンの大軍以上に無慈悲であると評している。そして原爆投下による日本降伏によって戦争が終結したことは、日本だけでなくシンガポールやマレーでも多くの人命が救われたと判断している。

④教科書と補助教材などから

a. シンガポール人の戦争中の苦しみ

シンガポールの教科書の日本像が厳しいことは、リー元首相の記述で容易に想像できるが、その裏付けのため、シンガポールの中学校3～4年生用歴史教科書補助教材である前掲文献 a.b.c.²¹⁾の要点を、筆者の和訳によりつけ加えることにする。

日本軍の占領期間について最初に取り上げているのは、日本軍の統治が厳しく残忍である上、貿易の遮断により経済が破たんし苦しめられたことである。英軍が退却中に行った施設破壊も生活を一層困難にした。

人びとが最も恐れたのが日本の憲兵隊であった。到着するなり囚人を選び出し、見せしめに公開処刑した。そして次にリー元首相の回顧録に書かれていたように、多数の華人をひっくるめて東部海岸へ連行し処刑したと記述している。また憲兵隊が最も住民を恐れさせたのは拷問で、この残酷な責め苦を受け生き延びた人は少なかったという。

一方生活面では、ゴム・錫産業と貿易が停滞し、経済活動を麻痺させ失業者を増やし、庶民は飢えと栄養失調に苦しんだ。当然インフレが進行し、日本軍発行の軍票に代わり物々交換が横行した。

日本軍の分断統治政策は、マレーシアとほぼ同じなのでそこで述べる。ただ筆者の見解をあえて加えるならば、シンガポールで大多数を占める華人の差別虐待は愚策であった。それがレジスタンス運動を盛んにし、戦後共産ゲリラがシンガポールとマレーシアの国造りを妨げた。

以上のように、日本軍が残した数々の負の遺産を若い世代が忘れないように学校教科書で記述され続けているのが、この国の現実である。

b. 開国・明治維新から敗戦・復興まで

長い鎖国後の日本について、教科書は中学生に駆け足で次のように書いている。日本は開国と明治維新で、中国のように領土を奪われず、半植民地にもされず、欧米諸国から学んでアジア最初の近代国家を作り上げた。それだけではない。日清戦争でアジア最大の大国清を破り、次いでアジアで最初に欧米大国ロシアに勝利を収め、数年後には韓国を併合した。さらに第一次大戦ではミクロネシアの権益を手に入れた。しかしそれでも満足しない日本は、1931年に満州を、1937年は中国主要部を侵略、挙句の果てに1941年米英両国と開戦、その原因、経緯、敗戦などを説明している。しかし私が知る範囲では、アジア植民地に希望と勇気を与えたとは書いていない。

ところで、戦後日本が焦土から奇跡的な復興により、マレーシアから分離独立したシンガポールの経済に貢献したことは、日本に対する恨みの気持を少しずつ和らげたように思われる。またリー元首相をはじめとする指導者たちが、過去は忘れないが日本との経済関係を重視し、治安対策などを日本から学ぶ姿勢を取ったことで、対日感情を好転させた²²⁾。

⑤シンガポールの華人

最後に、戦争中といえども、華人が全部日本人憎しの気持ちに凝り固まっていたわけではないことを紹介する。元来華人は昔から地縁・血縁と個人の繋がりによる信頼関係を重視し、裸一貫で厳

しい植民地を生き抜き財をなしてきた民族である。筆者の父も戦時中南方軍総司令部付きの軍属としてシンガポールで働いた時期があった。たまたま非番のときに訪れたある中国寺院で偶然出会った華人と知り合い、その一族と交際するようになった。彼らは、戦後帰国し病気がちのため不遇な生活を送っていた父を、来日して見舞い、色々と援助し励ましてくれた。また現地日本駐留軍で働いた一族の第二世代に属する女性は、彼女の上司だった日本軍将校を「親切的な紳士だった、日本軍人も人による」と筆者に話してくれた。この一族との交際は戦後 67 年経った今日迄続いている。筆者が 1992 年から 96 年までシンガポールで働いたとき、あたかも親族のように付き合いいろいろと便宜を図ってくれた。

それにつけても残念だったことは、尊大に蛮行を働き残忍な行為をする日本将兵が多過ぎたことと、兵士を厳しく監督しなかった上官の無自覚さである。さらにその原因を遡ると²³⁾、彼らは、日本軍内でごく当たり前に行われていたシゴキ、特に初年兵シゴキに代表される暴力行為を、占領軍兵士として強い罪悪感なしに大っぴらにもっと激しく行っただけであろう。それが民族習慣が違う住民感情をどれほど傷付けたかとも知らずに。

(3) マレーシアの日本像

①参照した主な文献

- a. History of Malaya (Merissa Champion, Joy Moreita—英語版教科書)
- b. 「ラーマン回顧録」 (小野沢純監訳 鍋島公子訳 井村文化事業社 勁草書房 1987)
- c. The Certificate History of Malaya 1400 ~1965 (by M.Muthulingan, Tan Phing choo)
- d. A History of Southeast Asia (by D.G.E. Hall 1970)

②始めに

マレーシアも民族構成比率こそ違え、シンガポール同様マレー人、華人、インド人住民からなる多民族国家である。国際校を除く小中高校では、マレーシア語(旧マレー語)と英語が必修で、その他に、中国語あるいはタミール語が両民族校で学べる。さらに今年から、小学校で理科と数学を英語で教える試みが始まった。参照した歴史の教科書が英語版であるのは、そのような背景がある。

③教科書の記述から

この国の教科書は、日本像への厳しさがシンガポールよりやや緩やかである。これは日本軍が目の敵にした華人の比率が低く(約 30%)、最大多数のマレー人(約 60%)をこの国の主人公として優遇し、励ます政策を取ったからであろう。

マレーシアについては、教科書研究センター(東京都江東区千石)に所蔵されている英語版歴史教科書 Merissa Champion, John Moreita による「History of Malaysia」を基本に記述する。特に断りがなければ筆者による同書の和訳または要約である。

a. 明治維新の成功から世界の列強へ

この教科書の「太平洋戦争と日本占領の衝撃」の章で、最初に取り上げられているのは明治維新である。日本は、遅れた封建的国家から、政治・経済・社会の大変革を成し遂げ、近代的な工業国となった。また陸海両軍の増強に努め、若者に軍事訓練を施した。その結果、露日戦争（1904～1905年）ではロシアに勝利し、世界の強国であることを実証した。日本はアジア諸国の中でヨーロッパの列強を破った最初の国家となった。しかし第一次世界大戦後、日本の海軍力は1922年のワシントン軍縮会議で米英両国により制限されることになった。

b. 東南アジア侵略の背景と成功の理由

日本は大東亜共栄圏構想を推進し、東南アジア諸国を西欧支配から解放することを目指した。次に、豊富な資源の獲得と過剰人口の受け皿とする目的があった。また第二次世界大戦の勃発で英国の防衛体制が手薄になったことも侵略に踏み切った理由である。

初戦の成功の理由を12項目にわたってあげている。要約すると、侵略計画は周到、戦闘部隊はジャングル戦に訓練され、マラヤとシンガポールの防衛体制は調査済み。そのうえで有能な指揮官（山下中将）のもと優れた戦術を駆使した。また日本将兵はマラヤ軍兵士より訓練が行き届き、経験も豊富で、空軍と戦車の援護を受けていた。彼らは高いモラルと士気でも勝っていた。

他方、マラヤ側は戦争準備をしていなかったし、シンガポールの備えは海からの攻撃を想定していた。その上マラヤ軍兵士の大半はジャングル戦の訓練を受けていない若い兵士たちで、兵器も不足し、海軍力・空軍力もなかった。その上欧州の戦争で英国は新たに最新式の海空軍や人員の追加援助ができなかった。

また「アジア人のためのアジア」という日本軍の宣伝は、マラヤ軍の士気を弱め、日本軍への地元住民協力獲得に役立ったし、インドを英国から解放するという約束は、インド人兵士の英軍に対する忠誠心を弱める結果となった。

c. 日本軍の占領時代 1—厳しい統治と経済の悪化

まずシンガポール同様軍政部が統治し地元代表を含む協議会が設けられたが、助言機関にすぎなかった。各州のスルタン制²⁴⁾の継続は認められたが権限は取り上げられた。

日本軍政部は絶対的協力を要求し、従わない者は誰でも厳罰に処した。憲兵隊は地方警察を管轄し、反日容疑者は拷問され死刑となる者もいた。日本化政策²⁵⁾も推進している。

日本占領下になると庶民の生活が苦しくなった。錫とゴムの生産が停滞し失業者が増え、食糧不足が深刻になった。プランテーションに広い土地を割いていたので、戦争で輸入が止まると食糧不足に陥ったのである。日本軍政当局は食糧増産運動を始めたが、飢餓と栄養失調による住民の死亡は止まらなかった。町や市街地居住者の食糧不足は特に深刻で、農村部への移住が増えた。工業製品の不足は手造り代用品で賄った。このように物不足がひどくなると、日本軍が発券する軍票価値は失われインフレが進行した。さらに日本軍は軍用に病院の医薬品や医療器具を強奪し補充をしなかったのも、熱帯風土病が蔓延した。

d. 日本軍の占領時代 2－民族分断統治

日本は、反ヨーロッパ人政策を人種民族の基本としたが、アジア人たちもそれぞれ被害を受けた。まず華人は信用されず、拷問され、虐殺される者も少なくなかった。またタイとビルマ国境の「死の鉄道」²⁶⁾ 工事に徴用される者、金持ちで多額の寄付金を取られる人々もいた。ヨーロッパ人は乱暴に扱われ捕虜収容所に収容された。「死の鉄道」へ送られた人々もいる。ユーラシア人²⁷⁾ も、白人との混血故に厳しく扱われた。

一方インド人はかなり良い扱いを受けた。英国からインドの解放を目指す以上、彼らの支持を受ける必要があったからである。それでも港湾や軍施設で働かされた。「死の鉄道」へ送られた者もいる。一方マレー人は原住民であり、最大多数を占めていたので、彼らの支持と協力を得るため最も優遇された。

e. 日本軍の占領時代 3－レジスタンス

厳しいうえに残酷で無情な日本占領軍に対し、華人、インド人、マレー人の如何を問わず、多くのレジスタンスグループが結成された。彼らの主な目的は、サボタージュと連合軍再上陸時の援助であった。その中で最も強力な多数派は、マラヤ共産党が指導する MPAJA²⁸⁾ マラヤ人民反日軍である。

f. 日本占領が齎したもの

日本の降伏後、直ぐに無政府状態になった。MPAJA が多数の町村で実権を握り、日本協力者などが拷問され惨殺された。占領中には「死の鉄道」や残酷な統治のために何千何万という人命が犠牲となった。飢餓や病気で死んだ人も少なくない。

日本が降伏して 3 週間後に英国軍が帰って来ると、MPAJA は解散され統治権が英国に戻された。もっとも MPAJA 構成員の中には武器を隠し持ったものも多く、後に共産ゲリラ活動が長引く一因になった。1946 年民政に復帰したが、マラヤの人々に対する英国植民地当局の権威と信頼は戦前に比し失墜した。また占領中マレー人に対し反華人宣伝を行い、マレー人こそがマラヤの正当な主人公であると日本が言い続けた結果、戦前のマレー人にはなかったナショナリズムの感情が生まれた。

以上がマレーシアの英語版教科書の要約である。ここでは日本軍の厳しく残酷な統治を通じて、彼らの日本像が極めて悪いことが分かるが、同時に日本の評価すべき点についても若干触れ、明治以来占領迄の日本像がマイナス評価ばかりでなかったことに気づく。その後日本の急速な復興と円高に伴い、実に多くの日本企業、特に電機産業が西部マレーシアに進出し、日本像はかなり改善されたことは確かである。終わりにマレーシア初代首相ラーマンの回想録²⁹⁾ から、占領中彼が体験した部分を若干引用して締めくくりにする。

④ラーマン回顧録から

a. 到着当時の日本軍

「最初の日本軍はその日の 5 時頃に到着した。到着するや否や自動車から自転車まで、とにかく、手当たり次第に略奪し始めた。礼儀正しい日本人を見馴れていた我々にとって、この蛮行

は大きなショックであった。」³⁰⁾

「道沿いや運河には首のない死体がたくさん放置され、ゴム園も破壊され、至るところが戦場だった。」³¹⁾

b. 日本軍の虐殺

「私は部下のエサから驚くべきことを聞かされた。日本軍がつまらない違反行為を理由に 40 人を連行し、虐殺してしまったという。翌日、私とラムダン・ディンは死体が埋められているところへ見に行った。そこに確かに墓はできていたが、死体が発するガスのために土はめくり上がり、すさまじい悪臭がただよっていた。この間にも警察と防犯隊は次々に人々を逮捕していた。このことを聞いて私はすぐさま警察署へ行き、全員を釈放するよう、かつこれ以上人々を逮捕しないよう命じた。」³²⁾

「ある華人の義勇軍下士官が、恐るべき事実を明らかにしたのである。真夜中に日本軍は収容者を外に出し、空地に連れて行き、自分の墓を掘るように命じたあと一斉に射殺した。」³³⁾

c. 難民救済

「タイとの旧国境を越えて、難民が大勢やってきたのである。彼らは悪名高いシャムの『死の鉄道』から逃れてきた人々で、すっかり弱り切っており、生きているのが不思議なくらいであった。我々はすぐに救援施設を設けることにした。-----後略」³⁴⁾

(4) タイの日本像

①参照した主な文献

- a. チャーウィット＝カセートシリ他 6 名「タイの歴史－タイ高校社会科教科書」世界の教科書シリーズ 6 (柿崎千代訳 明石書店 2002) —以後「タイ社会科教科書」と表記
- b. A History of Southeast Asia (D.G.E.Hall 1970)

②東南アジアにおけるタイの歴史的特異性

タイは、東南アジアの中で、唯一欧米の植民地とならずに独立を保った国である。ビルマ（現ミャンマー）・マレー半島を植民地にした英国とインドシナ 3 国を植民地支配したフランスの緩衝国という地の利もあったが、王制を柱に、政治的・経済的に比較的安定した統一国家であった。歴史も長く、大多数を占めるタイ族を中心とした民族・言語・宗教の同質さと同化した華人の存在、そして柔軟かつ巧みな外交と国内をまとめやすい地形が、植民地化を免れた原因と筆者は推量する。

従って、欧米植民地からの解放者を旗印に東南アジアに登場した日本にとって、この名目は最初から通用しなかった。他の東南アジア諸国のように、日本軍が占領軍として駐留することはなく、悪名高きビンタや拷問に象徴される蛮行を加える機会は、他の国々よりきわめて少なかったと推定される。但し、タイ政府に対して日本が戦争遂行に協力するようさまざまな要求を突き付けたことは事実である。

③「タイの歴史—高校社会科教科書」から推察できる日本像

教科書では、まず明治維新後、日本がいち早く近代化に努めたことを記述したうえで、次のように書いている。

「中国とロシアに対する日本の勝利は、ヨーロッパの植民地下にあるアジアの国々に影響を与え、小さな国のアジア人も、白人の大国ヨーロッパに勝てるかもしれないという確信をもたらした。

この勝利はアジア諸国に影響を与えただけでなく、日本は自国の威力に自信をつけた。」³⁵⁾

インドネシアと同様に、タイも日露戦争で日本がアジア諸国に対して果たした役割を教科書で記述している。

次に太平洋戦争中、日本とタイの関わりをタイの教科書は次のように記述している。

「タイは、枢軸軍の同盟国であった日本に、1941年12月8日に進攻された。プレーク＝ピブーンソンクラーム率いるタイ政府は、日本軍がタイ領を通過しビルマとマラヤへ向かうことを認めざるをえなかった。タイは日本に対抗するだけの充分な力を持たなかったのである。そしてタイは、自己防衛のために日本と同盟を結んだ。当時、東南アジア全域は、あまねく日本の勢力下に置かれていたのである。また、1942年1月25日には英米に宣戦布告をした。このため、タイも連合軍の攻撃対象となった。政府のこの決断によって、タイの一部の官僚、政治家、一般市民は国内外で反政府運動を開始した。この運動を、自由タイ運動という。この運動は、タイの独立を守り、英米が戦争に勝利しても、タイが損害を被ることを防ぐ目的にしていた。」³⁶⁾

ここに書いてあることから、タイ政府が自国の非力を自覚して、日本の要求に柔軟に対応しつつ自国の安全に保険をかけ、自国への悪影響を最小限に留めようとする強かさを持ち合わせていたことが分かる。

事実日本が降伏すると、タイ政府は英米への宣戦布告の無効を宣言したが、英国はこれを認めず、タイ政府に対して現物（米）と賠償金を、またインドに対しても賠償金を支払わせている。

しかしタイの一般民衆に対する日本軍兵士の蛮行や日本軍による略奪、食糧徴発などによるタイ民衆の生活窮乏や、タイ軍と日本軍の衝突に、この教科書は全く触れていない。東南アジア随一の米輸出国であったことも幸いであった。こうして、戦時中タイの日本像は、東南アジアで最も問題が少なかったように思われる。

（５）フィリピンの日本像

①2回戦場になったフィリピンの悲劇

タイが、東南アジアの中では最も戦場・占領・そして食糧不足から縁遠かった国とするならば、フィリピンは、最も戦争の被害を受けた国である。しかも日本軍の侵入時と米軍の逆襲時の2回激戦場になった。ビルマ（現ミャンマー）も日英両軍の間で同様に2回戦場になったが、戦闘の激しさはフィリピンの比ではなかったし、プランテーションが広がったためもあったフィリピンの食料不足は深刻だった。

②参照した主な文献

- a. 佐藤義朗編「フィリピンの歴史教科書から見た日本」（明石書店 1997）
- b. 永井均「フィリピンと対日戦犯裁判」（岩波書店 2010）
- c. 鈴木静夫「物語フィリピンの歴史」（中公新書 1997）
- d. History of Malay and Southeast Asia (Marissa Champion & Joy Morreira)
- e. 山本七平「一下級将校の見た帝国陸軍」（文春文庫 1987）
- f. 大岡昇「野火」（新潮文庫 1954）
- g. A History of Southeast Asia (by G.D.E.Hall 1970)

③「フィリピンの歴史教科書から見た日本」

a. 日本の近現代史概観

まず明治維新後、日本が短期間に成功した近代国家建設には一定の評価を与えつつ、段階を追って簡潔かつ具体的に説明し、日露戦争の結果について、

「日本はアジア人が軍事において西欧に劣っていないことを証明し、また、フィリピン、インド、インドネシアやベトナムなどのアジア諸国は、日本をアジア民族主義の新しいチャンピオンとして注目しました。」³⁷⁾

と記述、さらに

「日本が大国になったことは、第一次世界大戦ではっきりしました。」³⁸⁾

と具体的に説明している。今度の戦争で100万人を超える人々が犠牲になり、国土や都市が荒廃した国の教科書が、明治の日本にインドネシアやタイ同様一定の評価をしている寛大さに感銘を受ける。

しかし1930年代以降、日本の歴史が、極右主義者と軍閥一派による要人暗殺と満州事変後の孤立から戦争へ進んだと記述した。この点でもインドネシアやタイと同様厳しい評価を下している。戦後日本が復興し工業大国になったが、それに伴う課題も述べている。

b. 西欧文化の浸透と日本軍の占領

前述したように、2度も激戦場になったフィリピン人の戦争中抱いた日本像が、東南アジア最悪であっても不思議ではない。さらに長い植民地時代に育まれた文化の影響もあった。スペインの支配は300年続いた。片田舎の村でも常に一番高い建物は教会であった（大岡昇平「野火」p57 新潮文庫 1954）。20世紀初め米国植民地時代になると、反米独立運動もあったが、二院制議会と大幅な内政の自治が認められ、米国型民主主義に基づく政治運営に慣れ親しんでいた。1946年には独立も約束されている³⁹⁾。こうしてスペインからはカトリック文化とスペイン語、米国からは米国型民主主義と英語⁴⁰⁾が定着した。欧米文化に親しみをを感じる人が多くとも不思議ではない。しかし日本軍が、そのような歴史的・文化的背景を考慮し、きめ細かい心遣いでフィリピンを統治したとは考えられない。むしろ日本軍文化独自の価値観が傲慢に強制されたため、西欧文化が浸透していたフィ

リピン人、特に都市部、の反日感情を強くしたように思われる。これから明示する資料により、戦争と占領を通してフィリピン人の心に形成された日本像を検証する。

c. 日本が唱える戦争の大義名分に対する教科書の記述

「フィリピン占領のごく初期から日本は次のように表明、フィリピン国民を納得させようとしてきました。すなわち、日本は『東亜の抑圧人種の解放者』たる使命を持ち、日本の主導のもと『大東亜共栄圏』を設立し、以て東洋国家の幸福と繁栄の実現を目的にすると。その結果として、1942年1月21日、陸軍大将東条英機首相は帝国議会において演説、日本はフィリピンに対し『独立の名誉』を与えるだろうと声明しました。東条首相のこの約束は、1943年1月28日の帝国議会での演説でも繰り返し表明されました。フィリピン国民は日本が真の独立を与えると信じられなかったとして、この約束に冷淡を貫きました。」⁴¹⁾

d. 死の行進

「7万以上のフィリピンと米軍の兵士、および16人の将軍(フィリピン人将軍6人を含む)が、バタアンで降伏しました。日本軍は文明時代の戦争行為に関するあらゆるルールを踏みにじって、無力な捕虜を家畜のように群集させ、そして貴重品を略奪しました。

間もなく文明社会に衝撃を与えた悪名高い『死の行進』が訪れました。飢え、渴き、病み、疲労しきった捕虜たちは、バタアン州のマリベレスからパンパンガ州のサンフェルナンドまで無理やりに行進させられました。彼らには食糧も水も与えられませんでした。何百人にもおよぶすでに歩き続けることができない苦難の人々は、残酷な日本の警備兵に、無慈悲にも銃剣で刺されたり殴打されたりしました。サンフェルナンドでは、鉄道の箱型貨車に放り込まれタルラック州カパスまで連行され、そこでは密集収容されました。途中で、貨車の中で窒息する人が多く出ました。」⁴²⁾

e. ゲリラ戦術

「フィリピン全土が日本軍に占領されたわけではなく、フィリピン人すべてが日本軍に降伏したわけでもないことを特筆しなければなりません。占領初期には、バタアンやその他の戦場地から撤退してきた多くのフィリピン兵士や士官たちなど、多数の愛国的な民間人が戦火を蒙った祖国の防衛を継続し、以て山岳地帯に民主主義の灯を明々と灯し続けようと秘かにゲリラ部隊を結成し、ここにゲリラ活動であるゲリラ戦術が開始されました。-----後略」⁴³⁾

f. 民主主義を掲げて信義を貫く

「3年以上にわたり、フィリピン国民は日本軍の鉄のかかとの下で苦しみました。愛する祖国は残酷な征服者により荒廃しました。敵が祖国の生産物をもって生活しているために飢えに苦しみ、祖国で生産された繊維製品はすべて日本に出荷されるためにボロをまとい、嫌悪すべき憲兵隊(日本軍の警察)の脅威にさらされていました。日本による暗い占領期間を通じ、フィリピン人の精神は、口には言い表せないほどの苦難にもくじけず、救いを求めて神に祈り、来るべき夜明け一解放の夜明け一が来ることを願いました。」⁴⁴⁾

この四つの引用文に続いて、もう少し具体的な事例を紹介する。

④「フィリピンと対日戦犯裁判」（岩波書店）の一部要約と引用から

a. 反日感情の源、日本軍の蛮行

「日本軍の占領はフィリピン民衆から強い支持を得られなかった。少なからぬフィリピン人にとって圧政と感じられた。お辞儀の仕方が悪いなどの理由で公衆の面前で平手打ち（ビンタ）をくらわせる粗暴かつ尊大なふるまいや、拷問、強姦、集団殺害など、日本軍から残忍に扱われた原体験が、フィリピン人を反日に向かわせる一因となった。」⁴⁵⁾

b. マニラ市街戦に象徴される非戦闘員の大量殺害

一般市民の犠牲と文化財の破壊を避けた米軍の撤退により、日本軍が無血入城したマニラ市だったが、1945年2月には、日本の敗戦がはっきりしているにもかかわらず、日本軍の頑強な抵抗による市街戦は約1カ月も続き、マニラ市の5分の4は灰燼と化し、約10万人のマニラ市民が犠牲になった。

「多くのフィリピン人に強い衝撃を与えたのは、追い詰められた日本軍の無差別殺戮であった。

日本軍将兵の残虐行為は戦争末期にフィリピン各地で頻発し、フィリピン社会に深刻な傷跡を残すとともに-----（後略）」⁴⁶⁾

c. 敗戦後日本兵への報復

これまでの資料から、フィリピンの一般大衆が日本軍に対して抱いた反日感情が極めて強かったことが分かる。そこで日本降伏後どのような事態が日本軍将兵を待ち受けていたか、資料から引用する。

「日本の敗兵たちを待っていたのが、フィリピン人の激しい怒りであった。フィリピン人は今や丸腰になった投降兵にこぞって投石し、「バカヤロー」「ドロボー」など、恐らくは、彼ら自身が戦時中に日本兵から投げつけられたであろう片言の日本語を交えて罵言雑言を浴びせかけた（肉親を殺された恨みから、捕虜とすべき日本兵を殺害するに至るケースもあった）。フィリピン人たちは、報復的な感情に突き動かされた直接行動により、日本軍将兵の暴力行為や過酷な占領時代の憂さを晴らすがごとくであった。皮肉なことに、日本兵は昨日までの『敵』米兵の手によって、フィリピン人の過激な行動からその身を守られた。」⁴⁷⁾

（6）ベトナムの日本像

①参照した主な文献

- a. ファン・コク・リエン監修「ベトナムの歴史」）ベトナム中学校歴史教科書 世界の教科書シリーズ21（監訳者 今井昭夫、訳者 伊藤悦子・小川有子・坪井未来子 明石書店2008）
- b. チャールズ・フェン「ホー・チ・ミン」上（岩波新書1974）
- c. 早乙女勝元「ベトナム“200万人”餓死の記録」（大月書店1993）
- d. A History of Southeast Asia（by D.G.E.Hall 1970）

②ベトナムの特殊事情

戦争中ベトナムを含むインドシナ3国は、他の東南アジア諸国と比べて異なる事情が少なくとも二つあげられる。一つは、日本軍は戦火を交えて占領したわけではない。タイのように独立国ではないが、フランスの植民地管理当局は、本国が1940年6月ドイツに降伏したので同年9月日本に降伏した。日本軍は太平洋戦争が始まる前に戦火を交えずまず北部ベトナムへ、さらに1941年7月には南部ベトナムに進駐し、他の東南アジア諸国攻撃の前進基地化した。

したがって、戦闘に伴う現地人の犠牲者は皆無に等しく、また日本の敗戦まで連合国の反撃は空爆を除いてインドシナ3国に及ばず、一部のゲリラ活動を除き一般住民が直接戦火に巻き込まれることはなかった。戦争中の日本像は、さほど悪くはなかったと推定される。しかし、日本軍の駐留により、米を初めとする物資の調達が強制され、その結果、特に人口稠密な紅河デルタの住民は食糧など日常必需品の不足に苦しめられることになった。日本軍を解放者として手放しで歓迎できる状況ではなかったのである。

二つ目は、東南アジアで最も強力な反植民地活動組織、ベトナム共産党の存在である。誕生したのは1930年2月であるが、その指導者グエン・アイ・クオク（ホー・チ・ミン⁴⁸⁾）は、1919年ヴェルサイユ講和会議にフランス在住の愛国的ベトナム人代表として出席し、ベトナム民族の自由民主権、平等権、自決権をフランス政府に認めるよう求めた「安南人民の要求」を会議に提出、受理されなかったが、国際的に存在を認められている。1940年の日本軍進駐以後も、日本軍とフランス植民地当局の合同統治下でレジスタンス活動を続け、日本敗戦時には中国領に接する北東部に解放区を獲得、1945年9月2日には独立宣言を発表している。このようにしたたかな抵抗運動が浸透していた地区の日本像は、イデオロギーも加わって厳しかったと思われる。

③「ベトナム中学校歴史教科書」から

a. 戦前の日本記述

a-1. 明治維新の改革

「西洋の資本主義諸国、アメリカ・イギリス・ロシア・フランスなどは、ますます日本への干渉を強め、『開国』を迫った。この状況下で日本は、腐敗した封建制度を維持し続け、西洋植民地主義国の格好の餌食になるか、国の発展のために改革を行うかの選択を迫られた。1868年1月、明治天皇は即位後、日本を時代遅れの封建的状況から脱却させるために、一連の改革を実現させた。これが明治維新で、多くの領域（経済・政治・社会・文化・教育・軍事）にわたり改革が進められた。」⁴⁹⁾

この文からわかるように、日本の明治の改革断行を一応評価していることがうかがえる。事実この文に続いて、各分野での改革と結果を具体的に説明し、

「19世紀末から20世紀初め、日本は植民地化の危機を脱して発展し、資本主義工業国家となった。」⁵⁰⁾

と結んでいる。

a-2. 日露戦争後の日本

しかし20世紀になると、日本の記述は次のように変わる。

「20世紀に入ると、日本の支配階層は、侵略・膨張政策を強く推し進めていった。露日戦争（1904～1905年）は、ロシア帝国の敗戦で終結した。このようにして、日本は遼東半島、サハリン島の南部、台湾、中国の旅順港を占領した。1914年、日本は中国における勢力圏を拡張するために武力を用い、山東を占領した。日本帝国主義の植民地は大きく広がった。」⁵¹⁾
一党支配社会主義国の教科書らしいのは、日本資本主義発展の説明に続き「日本勤労人民の闘争」という項目を設け、日本の労働者が苛酷な労働条件下で搾取を受け、ブルジョワジーに対する闘争が始まったと記述している点である。また労働運動指導者の先達、後にソ連を中心にコミンテルン活動をした片山潜のプロファイルも紹介されている。

a-3. 両世界大戦の間

続いて「戦間期のアジア（1918～1939年）」という章で、国として日本だけを特に別扱いして取り上げ、米騒動、日本共産党設立（1922年）、経済恐慌の説明に続いて、
「経済恐慌から日本を脱け出させるため、商品の消費市場と資源の不足による困難を解決しようと、日本の支配層は国家を軍事化し、侵略戦争を引き起こし、外部へ膨張する政策を強めた。」⁵²⁾と記述している。国際協調派と対外強硬・軍事力過信派の対立には触れていない。

b. 日本占領下のベトナムと日本

1941年7月、フランスと日本の現地当局の間でインドシナ共同防衛協定が締結された。その内容を、ベトナムの教科書は、次のように説明している。

「この協定では、日本がインドシナのすべての空港と海港を軍事目的に使用する権利が承認された。太平洋戦争が勃発した時（1941年12月7日）、日本はフランス植民地主義に対して、インドシナにおける全面的な協力を約束させた。つまり軍隊の移動、食糧供給、兵営の設置、インドシナにおける社会秩序の維持などが容易に行えるようすべてを整える協定を結ばせ、日本軍の後方の安全を確実にした。以後、フランスと日本は堅く結託し、インドシナ人民を弾圧・搾取するようになった。」⁵³⁾

c. フランスと日本の結託

ところで、日本とフランスの結託方式について、教科書では、

「日本によるあらゆる面での威嚇や略奪にもかかわらず、フランス植民地主義は依然として、狡猾な手段を多く用い、最も高い利益を得ていた。-----後略」⁵⁴⁾

と、フランス植民地当局の強かさを書いている、すなわちインドシナ経済を独占するために戦時を利用して統制し、人民からの搾取・収奪を行い、酒税・塩税・阿片税の増税を図ったと批判した。

d. 日本への告発

「日本の取った凶悪な手段は、食糧（主として米）を強制的に安価で徴発したことである。食糧の一部は戦争の備蓄とされた。正にこの凶悪な手段により、深刻な食糧難が引き起こされ、

1944 年末から 1945 年初めにかけて、北部の農民を主とする約 200 万人の同胞が餓死した。日本とフランスによる二重の厳しい抑圧と搾取の下、人民の各階層は困苦を極め、悲惨な状況に陥った。」⁵⁵⁾

このように占領下の日本像は厳しいが、タイと同様、他の東南アジア諸国と目立って異なるのは、日本将兵の傲慢かつ残虐な行為が記述されていない点である。これはこのような蛮行が全くなかったというより、社会主義国の教科書の特徴として、政治・経済・イデオロギー重視の構成が中心になっているためであろう。もちろん冒頭で述べたように、戦場にならなかったことや、日本軍はフランス植民地管理者に多くの点を任せ、間接統治者の立場に留まっていたことも関係したように思われる。

e. 革命に至る運動

以上の内容で、日本に関わる記述はほぼ終わり、日本占領時代の記述は、ベトミン⁵⁶⁾を初めとする戦時下の革命運動の進展に終始し、前述のように 1945 年 9 月 2 日の独立宣言で終わっている。フランス軍の到着前に独立体制作り成功した既定事実の意味は大きく、その後、フランス、ついでアメリカと 20 年以上続く戦争に勝って統一ベトナムが最終的に発足した(1975)。教科書には戦後の対仏対米戦争の記述も相当分量あり、日本の占領時代の分量も少なくなっている。

2. 東南アジア諸国の日本像をまとめる

(1) 共通認識

① プラスイメージ

まず明治維新の改革は、表現の差こそあれ、全ての国が認め、教科書に記載されている。欧米の圧力をかわし、独立を守って近代化に成功した日本の実績を評価したと思われる。

また日露戦争も、明治維新ほどではないが、評価する国が多い。小国日本が、アジアで初めて欧米の強大国を破った快挙は、当時植民地だったアジアの人々に、勇気と希望を与えた。多くの国の教科書でもそのことに触れているが、ベトナムとシンガポールの教科書では、アジアに与えた希望には触れていない。他方アジアにおけるもう一方の大植民地インド民族主義に日露戦争が与えた影響を、「インドの歴史教科書」(帝国書院)から引用すると、「1905 年にロシアは日本により戦争に敗北した。これはヨーロッパ国家へのアジア国家の最初の勝利であった。日本そのものは帝国主義国家に転化し、戦争は中国における帝国主義諸国の権益のために戦われたとはいえ、日本の勝利はイギリスと戦うインドの民族主義者に自信をもたらした。」⁵⁷⁾と記述している。

また日本軍が初戦で東南アジアを席卷したことは、日本の敗戦後帰ってきた植民地支配国の権威(尊敬の念)は戦前より低下し、独立運動を加速する結果を生んだと複数の国の教科書が指摘している。

② マイナスイメージ

他方日露戦争後の日本像は大方の国で悪化した。日本自身が植民地を持つ帝国主義国の仲間入りをし、特に満州事変以後の日本の中国侵略を認める国はない。東南アジアではないがインドの教科書でも日本を次のように非難している。

「インドの民族的指導者は同時代の日本政府をインド人民の友人とは考えていなかった。つまり、日本はこのころ帝国主義政策を自ら採用していたので、民族的指導者は反帝国主義闘争で日本を自分たちの友とは考えなかったのである。」⁵⁸⁾

また欧米支配からの解放者として東南アジアに來たという宣伝は、初戦当時マラヤやインドネシアの民衆に歓迎される向きがあったが、占領後の残虐な統治と苦しい生活の影響に、戦況悪化も加わって次第に信用されなくなった。

日本軍の統治が、前宗主国より非人道的で残酷であったこと、日本の将兵が些細なことで暴力をふるい、拷問・処刑を含む残忍な刑罰を課したことは、タイ、ベトナム以外の国々の記述に共通して見られる。こうして、庶民の反日感情が強まったのである。

③ 共通認識のまとめ

現地教科書から占領中の日本像を比べてみて、東南アジア諸国とは金銭による補償問題は解決しているが、戦争の時期を中心とする歴史の共通認識形成はまだ十分ではないと痛感した。ついでながら近隣の東アジア諸国とは一層困難な課題が積み残されている。日本は、お互いに戦争・占領・領土争奪・支配の歴史を乗り越えて和解した仏独両国から、率先して学ばなければならない。ヨーロッパでは共通歴史教科書⁵⁹⁾まで出版されているのである。その際、東南アジアで（東アジアでは勿論）過去一方的に加害者であった日本は、相手国が戦争中に受けた苦痛を理解し、謙虚に前向きで、そして総合的な国益を配慮して問題解決に取り組まなければならない。第2次大戦後のドイツが、ナチスの蛮行に対する補償問題や怨念をめぐる問題を解決したように。

(2) グループ別・国別のまとめ

① 3つのグループ分け

筆者が、日本像に共通点が多い国々をグルーピングすると、フィリピン・マレーシア・シンガポール群(PMS)、タイ・ベトナム群(TV)、そしてインドネシア(IN)に分けられる。PMS群は、占領下の日本像が最も厳しい国々で、日本軍将兵から受けた非人道的仕打ちと生活の困窮に最も苦しんだ。次にTV群は、国土が戦場にならず、日本軍の直接統治が行われなかったため、少なくとも庶民の日本像はPMSほど悪くはなかった。またこの両国が米の輸出国で、主食輸入国のPMS群と比べて食糧事情が比較的良かった（特にタイ）ことも幸いしたようである。残るINの日本像は、前述した両群の中間に位置するよう見える。戦闘による災害と犠牲者は殆ど出なかった。しかし日本軍将兵による理不尽な暴行、行方不明になった多数の徴用者、反乱分子の厳しい処刑などがあった。ともあれ占領軍が、民族運動指導者のアドバイスを取りこみながら、日常行政業務を現地人に

任せ、共通言語の普及を助け、教育を底上げし、戦争末期には独立に手を貸したこともあって、日本像が PMS 群ほど悪くなく、教科書にもそれが反映されたように思う。

②国別のまとめ

マレーシアの教科書が、日本軍の周到な戦争準備を丁寧に分析し評価しているのは他国には見られない。また日本がマレー人の自覚を促し、彼らの間にナショナリズム意識が強まったという評価もある。マレーシアの日本像が、シンガポールほど厳しくないのはそのためであろう。

一方、インドネシアの教科書は、日本の占領にもプラス面があったと書いている。他国の日本軍政部が、せめてインドネシアの日本軍政部のように、現地民族指導者との関係を良好に保っていれば、東南アジアの反日感情はもっと和らいだことだろう。

3. この調査を活かす提言

(1) 東南アジア諸国に対して

①占領中の過去を決して忘れない

過去の加害を忘れず謙虚につきあうことが友好関係持続の基本である。東南アジア諸国が過去を忘れさせない教育をしているように、日本も同様の教育を行い応えるべきである。教科書の記述には細心の注意を払う必要がある。1982 年に教科書検定基準が改正され近隣諸国条項が追加されたのもそのためである。

②思い込みや偏った個人的見解により寝ている子を起こさない

特に責任ある立場の人、影響力がある人と機関は、寝た子を覚ます不用意な発言をよくよく慎むことが大切。友好・信頼関係を再構築するには長い時間が必要であるが、壊すのは一瞬でも可能である。日本軍の占領が、植民地からの解放に貢献したと恩がましいことを主張したり教科書に書いたりすべきではない。これは結果であって、そもそも誤った南進策に踏み切った第一の動機は、資源入手であったことを忘れてはならない。

③大東亜共栄圏の失敗を繰り返さず、明治の指導者に学ぶ

東南アジア諸国の教科書から明らかなように、日露戦争後帝国主義国の仲間入りを果たしてから、アジア解放の盟主と自惚れてしまい、明治の指導者たちが常に世界の強国の考え方に慎重に配慮しながら外交の舵を切ってきたことを忘れて孤立の道を選び、軍国主義に邁進して勝てない相手と戦争をするようでは、盟主の資格はなかったのである。

(2) 国内対立の溝を埋めるために

東南アジア諸国を含む近隣諸国と日本間の戦争を巡る経緯について、1980 年代から論争が活発になり、歴史教科書の内容にまで波及している。

例えば、相手を自虐史観・自虐教科書と批判し、日本人であることに誇りを持たせるべきである

と唱える人々がいる。反対に、日本の戦争を正当化するような教育は許されてはならない。対米英戦争は自衛とアジア解放のための戦争だったのかと批判する人々がいる。⁶⁰⁾ どちらの主張もそれぞれ一理はあると感じる。そのうえで、筆者は、今日東南アジアの教科書、指導者の回想録などの調査から、この問題について次のように考える。

東南アジア諸国が認めている明治維新の成果と日露戦争勝利の意義を、我が国の教科書でもはっきりと記述し、日本の若い世代に祖先たちの誇れる業績を伝え、日本人として誇りと自信を与えることが必要だと考える。従来の教科書に不十分な表現があれば、改善して欲しい。

他方で、東南アジアの人々に日本軍が行った恥ずべき蛮行を書かず⁶¹⁾、日本に都合が良いこと⁶²⁾が書かれている教科書が見られる。さらに日米開戦が、石油禁輸と中国全面撤退を突き付けられた結果、自衛戦争にやむをえず突入したという記述は、対英米開戦正当化、あるいは開戦言説論に取れる。

そもそも日本の間違いの遠因は、東南アジア諸国が指摘するように、日露戦争後アジア唯一の帝国主義国の仲間入りに始まる。以来日本の指導者と軍部、特に軍部は国際協調の重要性を認めず、特に満州事変勃発以後指導者はその暴走を止められず、繰り返される要人暗殺も手伝って、国際連盟脱退、中国本格的侵略、太平洋戦争に突入した経緯をきちんと説明しなければいけない。

筆者は、双方が平行線のままお互いに批判するだけでなく、国益を常に最優先に衆知を集めて歩み寄りを積み重ねることを望む者である。

3. 終わりに

言い訳になるが、講義とゼミの準備、そして7年前から継続してきた教育者斎藤喜博のまとめた執筆と現地調査に追われ、この論文執筆に必要な資料を事前に十分収集・調査・検討できなかった憾みがある。残された課題は多いと自覚している。

特に残された課題として、単一の国定教科書使用国は別として、教科書選択制の国の教科書を比較調査していないことが、この論文の中心テーマである関係国の「日本像」の妥当性を弱めている。在日大使館や文化センターに備えられていない以上、現地へ出かけて聴き取りと最新の資料収集をすることが必要であったと反省している。

またビルマ（現ミャンマー）など東南アジアを構成する主要国が含まれていないのも課題。和訳または英訳・仏訳された教科書の入手が筆者には必要である。越田稜編著「アジアの教科書に書かれた日本の戦争」（東南アジア編著）梨の木舎1990には、ビルマ・カンボジア・ラオスなどの教科書も一部分和訳されて登場するが、この本の主題に添ったごく僅かな部分しか紹介されていないので利用できなかった。

日本占領時代に関わった有力な指導者の回顧録ももっと入手する必要があると感じている。その他にもまだまだ至らぬ点はある。改めてお詫び申し上げ、ご教示をお願いする次第である。

謝辞

最後に参照させて頂いた多くの参考文献の出版社—明石書店・帝国書院・日本経済新聞社・（株）めこん・岩波書店・中央公論社・読売新聞社・（株）文藝春秋・クレスト社・小学館・新潮社・作品社・大月書店・井村文化事業社・勁草書房・草思社・日本の中学高校歴史教科書出版各社（名称は省略）—と、執筆者・翻訳者・編集者などの方々、教科書研究センターのスタッフ、そして関連文献出版に関わる外国の出版社と執筆者の各位に感謝申し上げます。

また執筆内容の検討に対し、貴重なお時間を割いて御協力下さり、有用な御助言と御指摘を賜った次の各位（順不同）に心より御礼申し上げます次第である。

辻村哲夫（共立女子学園常務理事）、渡辺孝映（前三省堂取締役教科書部門担当）、平戸幹夫（拓殖大学名誉教授）、稲葉清毅（前群馬大学副学長）、杉野一夫（シンガポール日本人会事務局長）、塩谷明久（前シンガポール教育省語学センター日本語科教諭）、粕谷紀美子（堀口エンジニアリング インドネシア前社長）、Allan Chia（Senior Lecturer SIM University, Singapore）、永田淳嗣（東京大学総合文化研究科准教授—人文地理学教室）、村井裕美子（日本教育大学院大学図書館司書）

注

- 1) 日本像は、国家像と日本人像の双方を指す。
- 2) ここでは、教科書資料が入手できたインドネシア・マレーシア・シンガポール・タイ・フィリピン・ベトナムとし、ビルマ（現ミャンマー）、ラオス、カンボジア・ブルネイ・東チモールは含んでいない。
- 3) 対極にある2冊の例を挙げると、不破哲三「歴史教科書と日本の戦争」（小学館 2002）と渡辺昇一・谷沢永一「こんな歴史に誰がした」（クレスト社 1997）がある。
また前者陣営論文が多い季刊誌に、「金曜日」・「世界」・「季刊中国」・「あごろ」・「軍縮問題資料」・「季刊女性教育問題」・「戦争責任研究」が、後者陣営論文が多い季刊誌に、「諸君」・「正論」・「自由」・「月刊日本」・「祖国と青年」・「Will」などが挙げられる。
- 4) guidebook、workbook、activity book など新しい教科書が改訂中で入手できなかったためである。
- 5) 東南アジア全体を対象にした比較的新しい論文例を上げると、倉沢愛子編「東南アジア史の中の日本占領」（東南アジア歴史と文化 32 2003）、倉沢愛子・後藤乾一「日本占領期関係シンポジウム報告」（東南アジア歴史と文化 25 1996）がある。CINII で検索すると多数の論文の名前がわかる。大部分は特定の国、または地域（バリ島、ジャワの農村など）で占められる。
- 6)、7) とともに「インドネシアの歴史」明石書店：p243)
- 8) 「インドネシアの歴史」（明石書店 p246）：ジャワ島上陸後パタビアとバンドンが1週間で占領されると、オランダは降伏した（3月9日）
- 9) 全訳 世界の歴史教科書シリーズ 32「インドネシア その人々の歴史」（帝国書院 p 133）：日本はアジアの光、保護者、指導者と宣伝し協力を呼びかけ、スカルノ・ハッタを含む殆どの指導者は日本を支援した。
- 10) 「インドネシアの歴史」（明石書店 p 250～251）：1942 年から 45 年まで毎年反乱があり、その都度鎮圧された。
- 11) 「インドネシアの歴史」（明石書店 p 249）
- 12) 「インドネシアの歴史」（明石書店 p 253～265）：日本軍指導者の独立宣言への経緯が書かれている。
- 13) モハマッド・ハッタ（1902～1980）。ジャワ島高原で出生、オランダ留学後帰国し独立運動に入り、流刑された。

日本占領後日本軍の相談役になって妥協しながらインドネシア化推進に努めた。回想録は有益な資料。

- 14) 「ハッタ回想録」 (めこん p428)
- 15) 「ハッタ回想録」 (めこん p436) : 日本軍政部へ忠告の一例である。軍トップと真正面から反対・抗議しない彼の巧みな手法を知ることができる。
- 16) 日本占領中の犠牲者記念塔が記念公園に建てられ、毎年記念祭が行われたが、日本大使は戦後50年間出席を許されなかった。多くの日本人がタクシーに遠回りされて法外に高い料金を払わされたと、前からシンガポールに住んでいた邦人から聞かされた。
- 17) 1923年シンガポール生まれ。原本は、Memoirs of Lee Kuan Yew The Singapore Story (:Prentice Hall1998)
- 18) 「リー・クアン・ユー回顧録」上 (日本経済新聞社 : p35)
- 19),20) 「リー・クアン・ユー回顧録」上 (日本経済新聞社 P38) なお「昭南島物語」上 (読売新聞社 p265~299)
「血の華僑狩り」に、リー元首相の回顧録よりはるかに詳しく、如何に華僑を集め、いい加減にえり分けし、多数を虐殺したかを、日本人の調査視点から書いている。
- 21) a. Lower Secondary 教科書と、b.歴史教科書のguidebook 他一般書を参照した。
- 22) リー元首相は、日本と日本人の長所も書いている。最近日本が沈滞しているのを見て。自著「目覚めよ日本」たちばな出版2001を書き、日本にエールを送っている。
- 23) 「リー・クアン・ユー回顧録」上 (日本経済新聞社 p36) : 日本将校が歩哨兵をいきなり3回平手打ちをした。それを見てリーは、日本兵士の現地人への蛮行が、日本人同士の習慣であることを知ったと書いている。しかし考えてみると、ビンタ、暴行、シゴキなどは、軍人世界だけではなく、学校の上級生と下級生、大学・中等学校の運動部や旧制師範学校でのしごきや暴力は日常見られることであった。今でも日本人社会に残っている。考える必要がある。
- 24) マレー植民地13州のイスラム教の首長。世襲制で各州の元首として君臨する。英国は間接統治のため大幅の権限を与えた。
- 25) 日本語習得普及、神社参拝、天皇崇拜などの押しつけ政策。
- 26) 太平洋戦争中、タイ・ビルマを結ぶ鉄道を建設した。英蘭の捕虜や東南アジアの強制労働者5万人以上が犠牲になった。熱帯気候・劣悪な食事・苛酷な重労働・危険な工事・熱帯病などが原因で、白人捕虜死亡者1740人が共同墓地に埋葬されており、「死の鉄道」と呼ばれる。特に難所であったクワイ川の架橋工事は映画にもなった。
- 27) Eurasian, 白人とマレー人・華人・インド人などアジア人との混血を指す
- 28) Malayan People's Anti-Japanese Army の略称、MCP は Malayan Communist Party マラヤ共産党の略称。
- 29) Tunk Abdul Rahman Putra トウンク・アブドウル・ラーマン・ブトラ (1903~1990)。マラヤ北東のケダー州でスルタンの7番目の息子として誕生。支配階級に所属し、1929年州留学生として英国ケンブリッジ大学卒業、帰国後ケダー州政府役人に。日本占領期には州会計検査官及び視学であった。戦後英国再留学後弁護士資格を取り、次いで独立運動指導者、そしてマレーシア初代首相となった。シンガポールのリー首相とはライバルであった。
- 30) 「ラーマン回想録」 (井村文化事業社 p333)
- 31) 「ラーマン回想録」 (井村文化事業社 p334)
- 32) 「ラーマン回想録」 (井村文化事業社 P336) : ラーマンはマレー人の支配階級であるので、地方のマレー人役人には命令ができた。日本軍幹部にも知人がおり、マレー人の中小役人には一定の権限が与えられていた。
- 33) 「ラーマン回想録」 (井村文化事業社 p338)
- 34) 「ラーマン回想録」 (井村文化事業社 p342)
- 35) 「タイの歴史」 (明石書店 p252)
- 36) 「タイの歴史」 (明石書店 p304~p305)

- 37)、38)「フィリピン歴史教科書から見た日本」(明石書店 p 50)
- 39)「物語フィリピンの歴史」(中公新書 p 159～160)：米国とフィリピン双方の議会を最終的に法案が通過し自治領となり、1946 年に独立が約束された。
- 40)「物語フィリピンの歴史」(中公新書 p 149)：米国は友愛的同化統治により親米感情を醸成しようとして、1901 年、平定した地方から小学校義務教育制を実施した。その際全科目に英語を導入した。
- 41)「フィリピン歴史教科書から見た日本」(明石書店：p 80～81)：前掲「物語フィリピンの歴史」により補足すると、1943 年 10 月 14 日フィリピンは独立し軍政は終わった。ラウレル初代大統領は、東条首相から独立と引き換え条件として要求された「対米攻守同盟」や「英米宣戦布告」を断り、日本側も断念した。しかし日比同盟は結んでいる(物語フィリピンの歴史 p194～196)。
- 42)「フィリピン歴史教科書から見た日本」(明石書店 p 76)：「死の行進」や「マニラ市民大量殺害」の責任を問われ、山下・本間両将軍は戦犯裁判で処刑された。「死の行進」については前掲「物語フィリピンの歴史」によると日本軍に誤りや誤算があり、文明国から非難を浴びる結果を招いたという。捕虜取り扱いの国際法に無知であったこと、捕虜人数が予想をはるかに越えていたこと、籠城中に食糧不足による栄養失調や熱帯風土病(マラリヤ、コレラ)が蔓延していたことである。そして熱帯の炎天下(乾季であった)に約 100 km を歩かされれば、倒れる兵士と非戦闘員が続出しても不思議ではない。日本兵士の心に刻み込まれた「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦陣訓の教えも、米比軍人への同情が不足し、邪険に取り扱うケースがあったかもしれない。
- 43)「物語フィリピンの歴史」(中公新書 p205～213)：ゲリラには、日本のフィリピン統治の一翼を担っている指導部の反対勢力である共産党やフク団(抗日人民軍)も含まれている。
- 44)「フィリピン歴史教科書から見た日本」(明石書店 p87～88)
- 45)「フィリピンと対日戦犯裁判」(岩波書店 p 4)：日本将兵の蛮行は、シンガポール・マレーシア・インドネシアとほぼ同じ記述である。
- 46)「フィリピンと対日戦犯裁判」(岩波書店 P4～5)：追い詰められた日本軍の、非戦闘員無差別大量殺害の典型的な例がマニラ市街戦である。日本軍上層部は、勝てる戦でないことを知りながら無益な抵抗を 1 カ月も続け、大勢の市民を犠牲にしたことは、取り返しがつかない非人道的な判断であった。太平洋の島々で絶望的抵抗を展開し、戦闘員以外が犠牲になった島の玉砕戦法を他国の大都市で行ったこの作戦は、無益な殺人を大量に行うことになった。
- この本に当時上院議員で戦後大統領になったエルビディオ・キリノ一家 7 名中 4 名が犠牲になった悲劇が紹介されている。一家はすぐそばにある妻の実家に避難する途中で 4 人の日本狙撃兵に機関銃で撃たれ、妻と長女が死亡、母に抱かれていた 2 歳の三女は地面に落下した後、日本兵の手で刺殺されたとその後の調査で推定されている。二男も母の遺体を収容しようとして果たせず、母の実家に逃げる途中に射殺されている(「フィリピンと対日戦犯裁判」p1～2)。
- 結局マニラ市街戦で、米軍戦死者は 1010 名、日本兵は 1 万 6665 名(僅かの投降者を除きほぼ全滅)であったがマニラ市民の犠牲者は前述のようにその 6 倍に達したのである(前掲書 p3)。
- また戦争を通じては実に 111 万人余のフィリピン人の人命が失われた。1939 年の人口約 1600 万の実に 7%に達した。一方動員された日本兵約 61 万人中約 50 万人(その 8 割は餓死)が戦没している。日本兵士も日本軍戦争方針のため多くの犠牲者を出したのである(前掲書 p5)。日本兵の餓死者が異常に多かった原因のひとつは、前掲山本七平「下級将校の見た帝国陸軍」p84～86)を参照されたい。
- 47)「フィリピンと対日戦犯」(岩波書店 p5)：引用されているフィリピン人の日本人への仕返しは、彼らが受けた苦痛に比べれば概ねささやかな程度である。続けてこの資料 p6～8 の記述から BC 級裁判について付け加えると、まず 1945 年マニラで。米軍による「パタアン死の行進」による捕虜虐待や「マニラ市街戦」による市民殺害など

を罪状として行われ、215名が交戦法規違反の罪に起訴され、90%が有罪、内92名が死刑宣告を受けた。それに続いて1947年から49年にかけて、フィリピン政府によるBC級裁判が行われ、現地住民の殺害・虐待・強姦などの容疑で151名が裁かれ、90%が有罪、79名が死刑判決を受けた。その後1953年アキノ大統領の恩赦により、死刑囚56名を含む108名が帰国送還の上釈放された。英米仏蘭中豪のBC級戦犯の執行率（約8割）に比べると非常に低い。フィリピンの寛大の処置が伺える。

- 48) ホー・チ・ミン（1890～1969）：ホーの生前フランスがインドシナ3国を征服（1859～83）した。1911年船員になって欧米を訪問、1917年にパリへ行き1919年には講和会議でベトナム独立を請願した。1930年ベトナム共産党を香港で結成。ソ連・中国をしばしば訪問して共産党と交流活動を続け、日本敗戦後直ちにベトナム独立宣言をおこなった。1946年フランスとの戦争が勃発、フランス敗北後は米国が北緯17°以南の南ベトナムを援助したが、ベトナムに敗れ、1973年全ベトナムの統一国家が誕生した。ホーはその4年前に死去した。
- 49) 「ベトナムの歴史」（明石書房 p405）：明治維新の成果を記述している。
- 50) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p408）、
- 51) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p408）：引用文の3行後段に、片山潜（1859～1933）に触れている。労働運動活動後、米国に渡り共産党員になった。続いてソ連に渡りコミンテルンで指導・活動後死去した。
- 52) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p443）
- 53) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p632）
- 54) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p632）「ホー・チ・ミン伝 上」（岩波新書 P171）の記述から補足引用すると、「日本軍が入ってきたとき、6万のフランス植民者は、以前と同じように暮らしつつけた。古くからの壮麗なやかたは、ほとんど棄てられなかった。商取引さえいつに変わることなくとり行われた。全アジアにおいて、仏領インドシナは、日本の唯一の実効ある政治的勝利であった。フランス人が日本のために働いたのである。」この文は、ウィリアム・レーデラー「苦悩するアメリカ人」p69からの引用である。
- 55) 「ベトナムの歴史」（明石書店 P632）：1944年末から45年初めに起こった200万人の死者の原因については、早乙女勝元「200万人餓死の記録」（大月書店 1993 p163～167）参照：原因を四つをあげている 即ち気候不順による凶作（異常な冷害）、南ベトナム（メコンデルタ）からの米輸送激減、ジュートなどへの転作強制、日仏による米の強制買い付けである。
- 56) 「ベトナムの歴史」（明石書店 p638～641）：要約すると、1941年5月、インドシナ共産党第8回中央執行委員会がベトナムカオバン省（中国国境に近い東北部）で開催され、ベトナム独立同盟（略称ベトミン）の設立が決定された。日仏の圧政から民族解放を目指し、農地解放を進めるため、貧富・老若・性別・政治的・宗教的傾向を問わず全ての愛国的同胞を結集する目的で、ベトミン戦線が生まれた。実際に本格的に武力蜂起が始まったのは、1944年末からで、日本降伏当時には紅河デルタを望み中国国境に隣接した北東山岳・丘陵地帯をすでに解放区にしていた。
- 57) 「インド その人々の歴史」全訳世界の歴史教科書シリーズ6（帝国書院 p335）
- 58) 「インド その人々の歴史」（帝国書院 p355）：追加すると、チャンドラ・ボースは、太平洋戦争中に国外で自由インド政府を作り、日本軍が捕虜にしたインド兵からインド国民軍を創り上げ、インドをイギリス統治から解放することを目標にした。しかし、ガンジーやネルは賛成せず、ボースは日本降伏直後飛行機事故死した。
- 59) 「ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書」（フレデリック・ドルーシュ総合編集 木村尚三郎編集 花上克己訳 東京書籍 1994）
- 60) この論文前掲注3）参照
- 61) 例えば、占領直後に計画的に行ったシンガポール華人の大量虐殺やマニラの市街戦で大量の一般市民の虐殺。
- 62) 例えば、大東亜共栄圏構想やアジア植民地解放に、日本が果たした役割を一方的に高く評価する記述。

Research Paper

The image of Japan and Japanese by the people of Southeast Asia during the Japanese military occupation from 1941 to 1945 —the summary of the original Japanese paper—..

Kubota, Takeshi

It is evident that Japanese invasion and occupation of Southeast Asia from 1941 to 1945 caused a great pains and distress to many people there. Countless local people were involved in violent battles, suffered terribly under harsh and cruel treatment by the Japanese army, and experienced a serious shortage of food, medicine, and other essentials.

The purpose of this paper is to make clear their image of Japan and the Japanese during their occupation, to explain why these perceptions varied from place to place, and to propose appropriate ways for Japan to keep a positive and lasting relationship with Southeast Asia.

To survey feelings toward Japan and the Japanese, local textbooks and three important political leaders' memoirs were the main sources. .

When the Japanese army invaded this area, they claimed that they were coming to free the local people from white men's colonial rule, and many local people accepted this initially except Singapore and Malay Chinese and Filipinos. However, as the occupation went on, many people became disenchanted with Japanese rule due to the cruelty and economic hardship they experienced. Ex-Singapore premier Lee Kuan Yew wrote in his memoirs that British rule was much better than the Japanese occupation. Thus, resistance movements began, especially in Malay and Philippines.

On the other hand, in Indonesia, Thailand, and French Indochina, people's feelings towards the Japanese were not as negative because they did not experienced violent battles. In Thailand and French Indochina, Japanese army did not rule them directly and there were little brutal treatment of local people by the Japanese army. Particularly, in Indonesia, the top Japanese leaders listened carefully to the advice and wishes of the top local leaders. After Japan surrendered to Allied Forces on August 15 in 1945, the commander of Japanese forces in Indonesia helped the local leaders declare the independence on August 17 .

Now, nearly seventy years have passed since the War ended. To continue friendly relations with these countries, Japan and the Japanese should not forget past blunder and strive to never repeat them. Modesty would be our best policy.

Key words: Southeast Asia, World War II, Japanese occupation, Japanese army, Local people, Local textbooks, Political leaders' memoirs
